（ひかみちゃん）

ほだかの里だより

（ほだかくん）

ー大高歴史の会会報ー第56号

令和7年（2025）　1月発行（冬号）

「ひかみちゃん」「ほだかくん」は、大高在住のイラストレーター大橋由起子さん作成の「大高歴史の会」のキャラクターです。大高は、昔々、「火上（ヒカミ）の里」、または、「火高（ホダカ）の里」と呼ばれていました。

第53号　目　次

大高「山口」の歴史探索（その3）　… … 山口初宏　P1～3

大高歴史の会のあゆみ　…… … ……　…　P４

大高のできごとあれこれ・大高の行事予定……　Ｐ５

大高の伝統行事（その１）どんど焼き ……
山口初宏 …　Ｐ６

大高「山口」の歴史探索（その3）

山口　初宏

中国酒

江戸で消費された酒は、下り酒と称された伊丹、池田、灘方面からのものが7～8割を占め、次いで尾張、三河などのものが1～3割を占めており、中国酒（上方と江戸の中間の国で生産された酒という意味）と呼ばれた。中国酒の生産地は知多、西三河の海岸地域で海岸沿いに千石倉が建ち並び、千石舟が直接酒蔵に横付けとなり江戸に酒が運ばれた。最大規模の千石倉が集まり、さらに船が倉に直接横付けできるような合理化が進んでいたのは当時としては当地以外には灘のみであったと思われ、酒造の先進地ぶりが窺われる。さらに当時の灘の代表であった剣菱よりアルコール度数が高い高アルコール酒が生産され、“鬼ごろし”などという異名で江戸では有名だった。このような高アルコール酒をつくる製造技術は如何なるものであったか詳細はわからないが焼酎を製造する蔵が多く、柱焼酎の技法が相当普及していたのではないかと想像されている。

江戸後期の酒造

安政元年（1854）のころから、尾張藩は財源獲得の手段として100石につき150両で酒造業の新株を無制限に許可したため、新倉の続出によって生産量が飛躍的に増加している。

鳴海と大高には多くの酒蔵があり明治の初め頃まで酒造りをしていた。中でも鳴海の下郷家千代倉屋は、銘酒玉の井を樽船で江戸に運んで財を成し、豪商と呼ばれた。弘化元年（1844）の酒造人として鳴海（下郷四郎兵衛、下郷善右衛門、寺嶋嘉兵衛、服部卯八郎、小島長右衛門）、大高（久野九平治、山口孫六、久野藤助、藤右衛門、三左衛門、友市、庄右衛門）有松（宗兵衛）の名前がある。

幕末の酒造状況

明治時代の酒造業

徳川時代三百年の間、その名声をうたわれた中国酒は明治になってもなお衰えなかった。製造技術の改良、販売努力によってその存在を示し続けたものと思われる。明治中期までは、その技術を習うために各地より視察団が知多地区に来ている。当時としては全国でも珍しい醸造試験所が豊醸組（現半田酒造組合）内に設けられ、宇都宮三郎、江田鎌次郎氏などが指導に訪れている。東京酒問屋組合発行の酒類集計表によれば、明治37年（1904）まで灘五郷清酒、中国酒、その他に分けられており、中国酒の存在を鮮やかに示している。

明治18年（1885）には大高に9軒の酒蔵（日高善兵衛、山口彦吉、近藤三次郎、近藤三左卫門、久野友一、久野藤右卫門、久野九平治、久野藤助、下村伊三郎）の名前が残っている。

伏流水に恵まれた良い水、良質の米、大高川を利用した良い船便が寄与している。

現在の酒造業

現在大高では萬乗醸造、神の井酒造、山盛酒造の3軒の酒蔵で酒造りが続けられ、全国の鑑評会に出品して金賞を受賞するなどしている。

大高の酒

萬乗醸造

11月になると収穫した新米で、酒の仕込みが始まる。1月から 3 月が酒造りの最盛期で、「郷土の酒造りを多くの人に知ってほしい」と 2 月には神の井酒造と山盛酒造では酒蔵を解放し、見学と試飲のできる「酒蔵見学会」も開かれている。

神の井酒造

山盛酒造

観音寺の古井戸

萬乗醸造から春江院へ向かう道の途中右手に、かつては豊富で綺麗な伏流水が涌いていた古井戸がある。この辺りの家庭ではこの井戸の水を利用していた。この地に廃寺の観音寺があったのでその名がつけられた。また、つい最近までは酒造りの水として使用していた井戸が 4 本あった。平成19年（2007）、近くの萬乗醸造の建物群とともに、国の登録文化財になった。

山口定成家が住んだ地

今回取得した一番古い戸籍によると、当家のご先祖が住んでいた場所は鳴海町であった。

鳴海町はもともと鳴海村といい、当家の古い故地（ご先祖の出身地）である大高村に接している。東西8キロ・南北5キロに及ぶ大きな村で、米の生産高は五千石を超していた。慶長年間（1596～1615）に東海道が整備されると、鳴海の集落は宿駅の町として繁栄した。「尾張府志」には「鳴海宿町」と記されている。寛永 12 年（1635）、幕府によって参勤交代の制度が確立されると、鳴海宿には前後して大名など

が宿泊する本陣・脇本陣が置かれ、街道の荷物を運搬する問屋や助郷制度も整備された。

地元の伝統産業としては有松・鳴海絞がありその起源については文献上はっきりしていないが慶長年間、名古屋城築城の際、九州豊後藩から来ていた人々が着用していた絞り染めを見た有松の竹田庄九郎が手ぬぐいに「豆しぼり」を作り販売した、豊後藩の侍医であった三浦玄忠の妻により技法が伝えられた、などの諸説がある。尾張藩の保護を得て絞り染めの名産地になると隆盛をきわめ村民の多くが生産に従事した。

明治11年(1878)には相原村、平手新田と合併して鳴海村となった。

山口一族の大高定住

山口一族が大高の地に定住した理由として、大高がかつて氷上(ひかみ)邑と呼ばれており、(古い資料ににによれば「火多加知(ひたかじ)」或いは「火高地」といわれていた。)「氷上邑」)が転じて「火高の里」と言われるようになったが、永徳2年(1382)の大火により、縁起が悪いとして火の字を改め「大高」にしたと伝わる。)大内氏の氏神である北辰妙見社と氏寺の興隆寺の存する氷上山と奇しくも同名の氷上山に抱かれた里であったことは見逃せない。

斎山稲荷社

山口一族の氏神、斎山稲荷神社の社殿は、氷上姉子神社の奥の院(元宮)が存した地と氷上山の尾根続きにある、斎山古墳の頂上部を切り拓いて設けられている。(2000年の東海豪雨までは道が通っていた。)斎山という名称が示す通り、この地は古くから斎の山、氷上山に住まう宮簀媛命をはじめととする祭主たちが身を清めて祈りを捧げた場所であった。

そもそも「斎宮」とは皇女から任じられる伊勢神宮の宮司の尊称であるが宮簀媛命も「斎宮」と称されたことから、宮簀媛命を祀る当社も「斎宮」と呼ばれ、鎮座地の山も「斎宮山」、後に斎山になったとされる。

寛永年間に代官、松原弥市右衛門の命(藩内のキリシタン取締りと関係があったかも知れない。)により、斎山が氷上姉子神社境内地から外れ、寛永 18 年(1641)に山口重應により稲荷社が勧請、奉斎された。

斎山稲荷に祀られている三柱の神々

御霊社(みたましゃ)　　奥宮社　　竜神社

先祖の大内氏が失った山口における氷上山の信仰拠点(興隆寺、北辰妙見社)を山口一族は大高の氷上山において再興したとも言える。

<引用文献>山口定成著「山口家の歴史」

<関連情報>　Wikipedia より抜粋

斎山古墳

名古屋市遺跡番号14－155

斎山稲荷社は、大府丘陵上の標高約30メートルの突端に築かれた斎山古墳の上に座すとされる。1997 年(平成 9 年)に行われた測量調査によれば当古墳は高さ3メートル、直径30メートルの円墳とみられているが墳丘の西側で1955年(昭和30年)頃に土取りが行われて畑になったといわれ、露になった西端崖面には前方部につながる形跡がみられることから、前方後円墳であった可能性も十分にあるという。

発掘調査は行われていないが、墳丘の西側石塚や東側参道で野焼きの円筒埴輪片が採取されている。　(完)

＜大高歴史の会のあゆみ＞
［令和６年（2024）10月～12月］

＜例会＞［第2･第4月曜日9：30～12：00例会(勉強会)を八幡社参集所で開催］

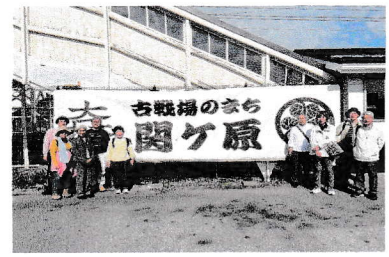
第330回（10/ 14）家康検定勉強会　名古屋市の2023年家康公検定問題を全員で勉強
第331回（10/28）　ほだかの里だより第23号
P4～6 尾張の絵師達（その２）尾関秋逸翁
中之郷・明忠院毘沙門堂天井絵を通して
P７　＜大高のできごと　あれこれ＞［平成28年（2016）7－9月］
第332回（11/25）　ほだかの里だより第23号
Ｐ8～9　大高の古文書　第２回　宗門送り一札（その２）
P10　　＜大高歴史の会のあゆみ＞［平成28年（2016）7－10月］
＜大高の行事予定＞平成28年10月～29年1月
第333回（12/ 9)）ほだかの里だより第23号
P11　大高の歴史的石造物を訪ねて
［第23回］おがわ　かめざき　よこすか　大(おお)の　道標地蔵
P12　史跡説明板の紹介［第3回　沓脱島跡］
ナゴヤ歴史探検
P94～95　「さらなる発展と継承」
第334回（12/23）大高史料館、階段、トイレ等の年末大掃除とDVD鑑賞

＜その他の活動＞［会のあれこれ情報］

「会報第55号(令和６年秋号)発行」（10月4日）
約700部、印刷、於　緑区社会福祉協議会　丁合は10月7日の例会にて実施

「中部電力テクノフェアー見学」10発25日（金）8名参加
大高町字北関山にある中部電力技術開発本部にて開催されたフェアーに参加、当日は社員でもある熊澤会員の案内によって会場を一巡し浮体式洋上風力や波状発電、地域伝統野菜「大高菜」へのバイオ炭の活用･･等最新技術の開発状況を勉学した。

「野外学習　関ケ原」（11月4日）10名参加
晴天の下、関ケ原へ出かけた。当日はアクシデントでJR列車が遅れたが、現地では記念館内の展示品、展望台からの大パノラマ見学や古民家での戦国おにぎり昼食の舌鼓み･･等、意義ある楽しい野外学習を満喫した。



＜ガイド実績＞　史跡・町並み散策ガイド依頼受付窓口：　深谷篤　090-8952-8610

10月　6日（日）10名　大高祭り見学　（深）
10月12日（土）　6名　氷上姉子神社見学、大高城散策　（深）
10月　7日（土）4名　氷上姉子神社散策　（深）
10月24日（木）28名　「桶狭間の戦いに思いを馳せて散策会」（深、上、杉、初）
11月　9日（土）19名　大高城跡見学ツアー　安城市教育委員会　（深、上、杉、初）
11月12日（火）16名　大高城跡散策　大高小学校2年生　（深、上、浜鐘、杉、初）
11月23日（土）47名　大高学区ふれあいウオーキング　斎山稲荷、名和古墳（深、初）
12月　3日（火）16名　大高城跡散策　大高小学校2年生　（深、上、浜鐘、初）

ガイド実績　（10 - 12月）　8件　146名

＜大高のできごと　あれこれ＞
［令和６年（2024）10月～１２月］

「大高まつり」　10月6日(日)本楽

晴天の下、大高祭りが盛大に」執り行われた。午前中は辻秋葉社～津島社～天神～大浜街道～八幡社、午後は辻秋葉社～高見～新町～氷上姉子神社、復路は辻秋葉社まで戻り解散。

8月に「大高祭り」が名古屋市の無形民俗文化財の第1号に登録されたこともあり沿道や氷上姉子神社全体が多くの見物客でごった返した。

松車の巡行

「みどり･シティ･フェスティバル2024」

10月26日(土)

青空の下、通称、区民まつりが大高緑地にて開催された。区内の官公署･団体がステージやブースで独自の出し物を披露し大勢の人出であった。

大高地域観光推進協議会も出店し物販した。

大高観光推進協議会ブース

「コミセン祭り」　11月16、17日(土、日)

大高地域コミセン祭りが2日間に渡り執り行われた。1階のステージでは演劇、演奏、合唱、ダンス、ブラックシアター等の日頃の活動成果が発表され、2階の各室では絵手紙、手編み竹細工、書学等の展示が行われた。大高歴史の会･大高地域観光推進協議会のコーナーでは昔の写真や民具、紙幣、大高産清酒ビン、明治の教科書･･等が展示され大好評だった。

ブラックシアターの実演

「サムライ･ニンジャ　フェスティバル 2024」

11月24日(日)10時～

秋の恒例行事が大高緑地にて行われた。当日、遠くは仙台、熊本や信州上田、近くは名古屋、清州の武将隊や忍者集団、甲冑隊が大集合。

特設ステージでは大武者行列の後、演舞、歌、トークショーまた、ブースエリアでのグルメ舌鼓、フィールドに於ける火縄銃実演･･等で盛り上がっていた。

「桶狭間の戦いと大高城」講演会

12月21日(土)13時～15時30分

名古屋市立大学主催の寄附講座が熱田区の名古屋教育センターで開催された。第1部「史跡大高城跡の調査成果について」、第2部「桶狭間の戦いと大高城」、第3部「大高地区の歴史的価値を生かしたまちづくりの推進」の3部構成で、高名な千田嘉博教授の講演、対談等で約800名の聴講者に大高の魅力が発信された。

大高の行事予定(2025年1月～2025年4月)

12月31日(火)～1月1日(水)各寺社越年行事、
1月13日(月)10時～成人式　大高3区合同、大高中学校
1月14日(火)6:00～10:00　どんど焼き(左義長)　八幡社、田中神明社
2月23日(日)10:00～　酒蔵開き、散策会
3月2日(日)　長寿寺高蔵坊稲荷大祭、
3月15日(土)　春江院弁財天大祭
3月30日(日)14:00～　太々神楽　氷上姉子神社
4月8日(火)　花まつり　長寿寺、薬師寺、春江院
注)上記行事は主催者の都合により変更の可能性あり

大高の伝統行事（その1）　どんど焼き

山口初宏

大高には昔から行われている数々の伝統行事がある。今回から紙面をお借りして行事の謂（いわ）れや内容を順次、紹介する。

第１回は正月明けに神社等で行われている「どんど焼き」である。大高はどんど焼きと呼んでいるが関西方面他では左義長ともいわれている。

大高では町屋川の八幡社、田中の神明社等で毎年1月14日の早朝6時頃から焚火を準備して正月飾りのしめ縄や旧年の神社のお札等を焼いてその年の健康や幸福を祈願するものでである。

どちらも町内会の主催で伝統を受け継ぎ、役員の方々が準備した薪や枯木を燃やして火を絶やせないよう確保している。その際に焼いた餅を食べると風邪をひかないとも言われアルミ箔に包んだ餅を焼いて食べたものだ。

筆者が幼い頃は祖母に連れられて大高川の堤防まで行き、土手に穴を掘ったその中で行われていた記憶がある。

町屋川八幡社では境内の一角に焚火専用のコンクリート造のピットが常設されている。

八幡社どんど焼き

田中神明社では神前に丸い大きな穴を掘り年末年始の越年行事に使用した後、どんど焼きにも利用している。

田中神明社どんど焼き

＜関連情報＞

水野染工場コラム　2023.08.23 より抜粋

どんど焼きの意味

「どんど焼き」とは正月に飾っていたしめ縄や門松などを地域の神社などで燃やす伝統行事のことです。

日本では古くからお正月には年神様が各家庭に訪れると言われていますがその年神様が空へと帰るのを、正月飾りなどを燃やした煙とともに見送る“送り火”のような意味が込められており、縁起物を燃やすことで、五穀豊穣や無病息災・商売繁盛を願う火祭りの一つとなっています。

どんど焼きの語源

① 火を燃やす時に「尊と（とうと）尊と（とうと）」と、林立てていたのが訛った。

② “どんどん”燃える様子から「どんど」の名がついた。

どんど焼きで燃やすもの

正月飾り、前年に使用したお守りやお札、慶事やお歳暮でいただいた熨斗（のし）、正月に書いた書初め‥等

説明ガイドさん＆新規会員
募集中です！
連絡先（０５２）６２３－２３０７

大高の歴史を学び伝える

大高歴史の会　会報
第５６号 2025 年１月

［平成 21 年（2009）４月発足］

連絡先　（代表）　：山口　初宏
〒459－8001
名古屋市緑区大高町字天神４４
０５２－６２３－２３０７
散策関係　担当　：深谷　篤
０９０－８９５２-８６１０

会報は年４回発行の予定です.
（冬１月、春４月、夏７月、秋 10 月）
会報バックナンバーご希望の方は上記連絡先へお問い合わせ願います

（本号の編集は山口初宏が担当しました）